

# 中学校社会科における深い学びを実現する対話の在り方

## 知識構成型ジグソー法を応用した実践の考察

松田 涼（教育実践開発専攻）

### 1 課題意識

中学校社会科の目標は、「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育むこと」である。その目標を達成するために、社会的な見方・考え方を働かせながら、課題を追究したり解決したりする活動を通して、生徒一人一人の深い学びを実現することが求められている。また、深い学びの実現に向けては、他者との対話を通して、多面的に捉えて、多角的に考察することが必要不可欠であると学習指導要領に記載されている。

以上の認識のもと、私は、これからの予測不可能な社会を主体的に生きていく公民を育てるために、生徒が他者と対話することを通して学びを深めていくような授業を実現したいと考えた。

私は、授業で深い学びを実現するために、M1前期の実習において、実習校では深い学びをどのように実現しているのかという視点で観察を行った。そこで、私はジグソー法を取り入れた社会科の授業を観察した。その授業では、生徒が他者との対話を通して、社会的事象を多面的に捉え、多角的に考察することによって、学びを深めている様子が観られた。この授業を観た私は、多様な視点や立場から対話することによって、生徒の深い学びを実現できるのではないかと仮定した。その仮定に基づき、M1後期の実践では、生徒の深い学びを実現するために、生徒が多様な視点や立場から対話する場を設定した。しかし、生徒の学びを深めることはできなかった。原因としては、対話の根拠となる資料の不足や、対話をする目的意識の欠如などが挙げられた。自身の実践と観察した実践を振り返り、比較する中で、中学校社会科において深い学びを実現するためにはどのような対話の在り方が必要なかを考えるようになり、自身の課題意識が芽生えた。

上記の課題意識から、研究テーマを「中学校社会科における深い学びを実現する対話の在り方」と設定し、それを明らかにするために、M2では2つの検証実践を行った。

### 2 研究の全体像

#### (1) 中学校社会科における深い学び

研究の全体像として、まず本研究で目指す中学校社会科における深い学びについて定義する。学習指導要領等の記述を参考に、私は中学校社会科における深い学びを「生徒が社会的な見方・考え方を働かせながら、ある社会的事象について多面的に捉え、多角的に考察し、根拠を明確にして自分の結論を導くこと」とであると定義した。

#### (2) 深い学びの実現に資する対話の位置づけ

次に、深い学びと対話の関係性について整理する。学習指導要領の整理から、生徒が「社会的な見方・考え方」を働かせながら知識を相互に関連付けたり、多面的・多角的に考察したりする際には、対話を通して他者と協働する中で、生徒が自分の考えを広めたり、深めたりすることが重要であることが読みとれた。つまり、対話を通して生徒の見方・考え方を広げ、多面的・多角的な考察をすることが、中学校社会科における深い学びを実現することにつながるということが分かった。

#### (3) 深い学びを実現する対話についての整理

さらに、深い学びを実現する対話の在り方について知見を深めるために、新潟県中学校教育研究会が発行している『授業情報誌 Class・学び合う授業』を参考に、整理を行った。その結果、以下の2つが必要であることを見出した。

- 単元を通して、社会的な見方・考え方を働かせながら、思考の拡散と収束が起きるような課題設定
- 根拠を明確にして論理的思考を働かせる対話活動

よって、対話を通して深い学びを実現する学習においては、この2つが実現される手立てを講じる必要があることが分かった。

#### (4) 深い学びを実現する対話の例:知識構成型ジグソー法

これまでの整理を踏まえて、生徒の深い学びを実現する対話の在り方について検証するための手立てとして、知識構成型ジグソー法に着目した。これはM1前期の実習で観察した、対話を通して深い学びを実現していた授業で取り入れられてい

た学習方法である。知識構成型ジグソー法が、本研究における深い学びを実現するための手立てとして効果的かどうか考察したところ、知識構成型ジグソー法における5つの学習ステップを踏むことで、自身の見出した深い学びを実現するために必要な2つの要素を達成できると考えた。そこで、知識構成型ジグソー法を、自身の目指す深い学びを実現するための手立ての1つとして加えた。

また、本研究には、知識構成型ジグソー法を「応用」したという特徴がある。一般的に知識構成型ジグソー法は、「ある課題の解決」という一つの収束に向かう課題解決型の学習で用いられる。しかし、本研究では課題解決型の学習だけでなく、オープンエンド型の学習においても知識構成型ジグソー法の学習ステップを取り入れた。課題解決という収束まで行かずとも、知識構成型ジグソー法の学習ステップを取り入れているため「応用」と表現し、名称を「ジグソー法的学習活動」として手立てとした。

次章より、知識構成型ジグソー法を応用することによって深い学びの実現を目指した実践Ⅰ・Ⅱについて述べる。

### 3 検証実践

#### (1) 実践Ⅰ〈オープンエンド型〉

私たちと現代社会

「予測不可能な社会を生きる私たち」

##### ① 単元構想と深い学びを実現する手立て

本単元は、「公民的分野の導入部」として、これから学ぶ公民的分野の学習で扱う現代の社会的事象について関心を高め、課題を意欲的に追究する態度を養うことを主なねらいとした。さらに、導入部として、現代社会の多様な事象への興味・関心や意欲を高めることに加えて、公民的分野全体を通して現代社会の見方・考え方を働かせる単元構想にする必要があると考えた。

本単元で働かせた現代社会の見方・考え方は「事象のもつ両面性」である。現代社会の事象は、どの視点、どの立場からみるかによって見え方が変わってくる。その見え方を、今回はプラスの面とマイナスの面に分類し、事象のもつ両面性に気付くような単元を構想する。公民的分野の導入部として位置付けた本単元において、「事象のもつ両面性」に気付かせることによって、この後の公民的分野の学習において、「対立と合意」、「効率と公正」といった両面性をもつ現代社会の見方・考え方を働かせるきっかけになると考えた。

本単元を通して目指す生徒の姿は、「現代社会の特色として、私たちの生活に関わる多様な事象が存在していることを理解し、それらの事象はみる立場によってプラスにもマイナスにもなるという対立やジレンマが存在するという構造を理解する姿」とした。

上記の見方・考え方を働かせ、目指す生徒の姿を実現するために、以下の3つの手立てを講じた。

- 生徒の興味・関心、問題意識を高めるような題材の設定
- ジグソー法的学習活動
- 生徒の考えや考えの根拠を可視化すること

##### ② 成果と課題

上述の単元構想に基づき3つの手立てを講じ、検証をしたことによって、以下の成果が得られた。

- ・単元を通して現代社会の見方・考え方を働かせることができた生徒が増加した。
- ・考えの根拠を明確にして現代社会の特色を捉え、目指す深い学びの姿に近づいた生徒が増加した。
- ・生徒一人一人の国家及び社会の形成者としての意識を高め、この後の公民的分野への学習意欲を醸成するという、本単元の意義を概ね達成できた。

上記の成果について、個別の事例を示す。

生徒Aは、「私たちがこれから生きる社会は、どのような社会になっていくのだろうか。」という問いに対する記述の変容から、深まりを観ることができた。単元初めには、「予想できない社会になると思う。なぜなら、思いつかないから。」と記述していたが、単元終わりには、「便利だが問題もある社会になると思う。なぜなら、例えば、AIやロボットによって仕事が楽になるかもしれないが、AIに能力をこされてしまうから。また、地球を開拓して行って、資源はたくさんとれたりどこでも車で行けるようになったりするが、森が破壊され、地球環境が悪化していくから。」と記述していた。生徒Aは、単元初めではこれからの社会へのイメージがもてず、根拠も挙げることができていなかった。しかし、上記の3つの手立てを講じ、他者との対話を通したことによって、生徒Aは現代社会の見方・考え方を働かせながら社会的事象を捉え、それらを根拠にして、これからの社会をイメージすることができるようになった。このように見方・考え方を働かせ社会的事象を両面から捉え、根拠を記述することができた生徒は、単元初めは全33名中9名(約27.2%)だったが、単元終わりには全32名中21名(約65.6%)へと増加した。

以上の結果から、自身の目指す深い学びを実現するために設定した3つの手立ては有効だったと言える。本単元では、公民的分野の導入部としてオープンエンド型の学習を行い、現代社会の多様な事象への興味・関心を高めるという目的を達成することができた。しかし、公民的分野の各単元で課題の解決に向かって収束していくような学びを深めるため、実践Iで得た成果を踏まえて、導入部で学んだ現代社会の見方・考え方を応用して働かせながら、課題解決に向かうことができる単元を構想することとした。このことにより、今回生徒に観られた学び以上に深まりのある学びが実現できると考えた。

(2) 実践II〈課題解決型〉

地方自治と住民参加

「環境モデル都市としての新潟市に生きる私たち」

① 単元構想と深い学びを実現する手立て

本単元では、実践Iで見出した手立てを応用し、課題解決型の学習で生徒の深い学びを実現することをねらいとした。本単元では、実践Iで総論として扱った6つのテーマの中から1つに着目し、そのテーマを実践IIの題材と関連させた課題解決型の学習を組織した。それによって、生徒は導入部で働かせた見方・考え方を応用しながら、学びを深めていくことができると考えた。

本単元で働かせた現代社会の見方・考え方は「共生」と「持続可能性」である。「共生」は、実践Iで働かせた「事象のもつ両面性」という「ある1つの事象をプラスの面とマイナスの面の両方からみる」という見方・考え方と関連させたものとして設定した。これは、プラスの面とマイナスの面のように相反する要素ではなく、「2つの要素が共存し、相互に利益を受けながら密接に関わっている」ことによって新潟市の特色が生まれているという見方・考え方を働かせるためである。さらに、実践Iで扱ったテーマ「環境問題」と関連付けた題材について追究することによって、「共生」だけではなく、「持続可能性」という見方・考え方を働かせながら、新潟市の取組について考察することができると考えた。

そして、本単元を通して目指す生徒の姿は、「新潟市が地域的特色をうまく活用しながら世界的な課題に向き合い、誰もが住みやすい持続可能なまちづくりを目指しているという特色を理解するとともに、捉えた特色を踏まえて、新潟市を持続可能なよりよい街にするために自分に何ができるかを考えることができる姿」とした。

上記の見方・考え方を働かせ、目指す生徒の姿を実現するために、以下の3つの手立てを講じた。

- 生徒の興味・関心、問題意識を高めるような題材の設定
- 知識構成型ジグソー法
- 生徒の考えや考えの根拠を可視化すること

② 成果

上述の単元構想に基づき3つの手立てを講じたことによって、自身の目指す深い学びを実現した生徒の姿を観ることができた。以下より、個別の事例を示す。

生徒Bは、単元のまとめである「環境モデル都市として新潟市が行っている取組には、どのような特色があるのだろうか。」という問いに対する記述において、深い学びを実現した姿を観ることができた。生徒Bは、新潟市の取組を多面的に捉え、多角的に考察したことによって自身が見出した特色を、図式化してワークシートに示していた。

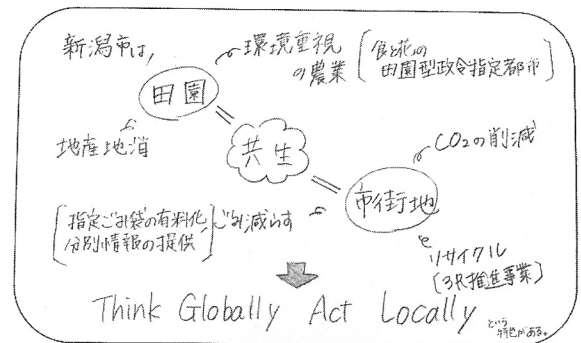


図1 生徒Bのワークシート

生徒Bが、抽象度を高めた構造図を作成して、新潟市の特色を捉えることができたのは、3つの手立てが有効に働いていたからであると言える。

3つの手立てを講じたことによる実践IIの成果は、実践Iで得られた成果に加えて、3つの手立ての有用性について、より具体的に明らかにすることができたことである。それが以下の3つである。

- ・生徒が社会的事象を多面的に捉え、多角的に考察するために、「知識構成型ジグソー法」という手立てが有効に働いた。
- ・生徒が現代社会の見方・考え方を働かせることによって捉えた特色を、生徒自身の言葉で表現できるようにするために、「関連付ける」ための手立てが有効に働いた。
- ・国家及び社会の形成者としての意識を高めるために、「生徒自身が主体者となって考えるような振り返り」をするという手立てが有効に働いた。

#### 4 研究の結論

##### (1) 実践Ⅰ・Ⅱから見出したこと

実践ⅠとⅡの成果を踏まえると、自身の目指す中学校社会科における深い学びの実現においては、以下の3つの手立てが有効であるということが明らかになった。

- ①生徒の興味・関心、問題意識を高めるような題材の設定
- ②知識構成型ジグソー法の応用
- ③生徒の考えや考えの根拠を可視化すること

2つの検証実践で明らかにした3つの手立てを踏まえ、自身の目指す深い学びの実現に向けた学習プロセスを、次のように表すことができた。

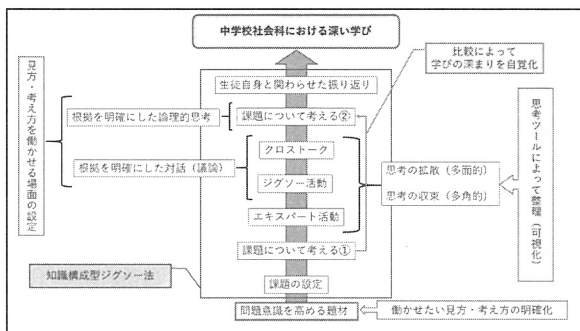


図2 自身の目指す中学校社会科における深い学びを実現する学習プロセス

また、今回の研究では、深い学びを実現する学習プロセスにおける「深い学びを実現する対話の在り方」についても明らかにすることができた。今回明らかにした深い学びを実現する対話の在り方として、上の図2中にも示したように「根拠を明確にした対話（議論）」を挙げることができる。

M1 後期の実践では、多様な視点や立場からの対話を組織したが、根拠が明確でなく、対話の目的意識も明確ではなかった。その課題を踏まえた実践Ⅰ・Ⅱでは、エキスパート活動でそれぞれが調べた内容を思考ツールによって可視化し、ジグソー活動で共有することによって、それらを根拠としながら、ジグソー活動やクロストーク場面において課題の解決に向け「論理的思考を働かせ、根拠を明確にした対話（議論）」が起きている様子を観ることができた。また、現代社会の見方・考え方を働かせながら対話をしたことによって、多面的・多角的な考察をすることができるようになった生徒の様子を観ることができた。

つまり、自身の目指す深い学び実現するために、対話は必要不可欠であり、その対話の在り方としては「思考ツールによって可視化した論理的思考を働かせ、根拠を明確にした対話（議論）」が今回の研究で明らかとなった。

さらに、公民的分野の学習として総論と各論の流れを踏むことが、深い学びの実現に効果的であることが分かった。今回の2つの実践の関連性は以下ようになる。

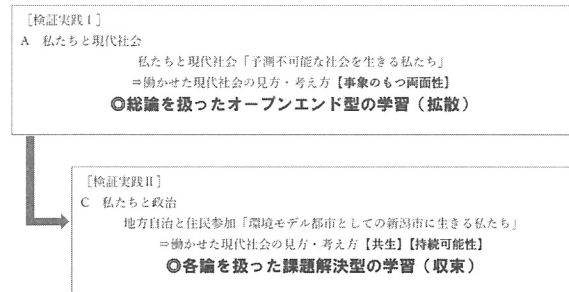


図3 公民的分野における総論と各論の関係性  
総論では、ジグソー法的学習活動を手立てとして講じた。ここでは、導入部の後に続く公民的分野の学習全体のイメージを想起させ、現代社会の多様な事象への興味・関心を高めることができた。そのための手立てとして、オープンエンドのジグソー法的学習活動が効果的に働いていた。

各論では、導入部で拡散させたテーマの一つと関連した題材について課題解決型の学習を行った。その際には、課題解決という収束に向かうための手立てとして、知識構成型ジグソー法を取り入れたことによって成果を上げることができた。

このように、公民的分野では、導入部で総論を扱ったオープンエンド型の学習を行い、その後の学習において各論を扱った課題解決型の学習を行うことによって、現代社会の見方・考え方を分野全体で鍛え、深い学びを実現することができると考えた。また、その際には、「ジグソー法的学習活動」と「知識構成型ジグソー法」を使い分けることが効果的であると分かった。

##### (2) 今後の展望

今回の研究によって、自身の目指す中学校社会科における深い学びを実現するための学習プロセスと深い学びを実現する対話の在り方、また公民的分野のカリキュラムの在り方について明らかにすることができた。今回の研究を通して、授業を単元毎に考えるだけでなく、公民的分野全体で、各単元の意味づけをし、「分野全体」で現代社会の見方・考え方を働かせ鍛えていくことが、深い学びの実現に効果的であることが分かった。

今回明らかにすることができた研究の成果を活かして、生徒一人一人の深い学びを実現し、予測不可能な社会を主体的に生きていく国家及び社会の形成者を育むために、今後も研究を続けていく。